

紀 要

第 6 号

目 次

粟津湖底遺跡出土の木質遺物	(伊東隆夫)
弥生時代の木偶と祭祀 —中主町湯ノ部遺跡出土木偶から—	(濱 修)
県内における磨製石斧の消滅年代について	(井上洋介)
土師器甕の変遷とその背景 —近江型土師器成立への諸段階—	(大崎哲人)
草津市笠山古窯出土遺物の紹介	
—笠山古窯の位置づけをめぐって・瀬田丘陵生産遺跡群の検討—	
	(畑中英二)
倭京の実像 —飛鳥地域における京の成立過程—	(相原嘉之)
近江八幡市大手前・御所内遺跡出土の銅印をめぐって	(田路正幸)
将棋史研究ノート(3) —王将と玉将—	(三宅 弘)
近江国坂田荘の開発(中) —長浜市大東遺跡を中心として—	(北村圭弘)
滋賀県八日市・永源寺地域における蔵王産花崗岩製中世石造美術の分布	
—八日市市・永源寺町石造美術石材分布調査概要—	(兼康保明)
滋賀県出土の埴輪資料集(その3)	(稲垣正宏)

1993. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

将棋史研究ノート(3)

— 王将と玉将 —

三宅 弘

1. はじめに

将棋とは王将を詰めるゲームである⁽¹⁾。相手方の手を読み、自分が有利になるように何手先、時には何十手先もの駒の動きを考えながら進める遊戯である。それはあたかも推理小説のような複雑な駆け引きを必要とする。敵と味方の駒の配置から、その動き、そして取られた駒が相手の持ち駒として、つまり敵の戦力として再び盤上に登場してくることまでも考慮しておかなければならないのである。従って、無数とも言える次の一手の中からたったひとつの正解を見つけ出すことは、極めて論理的な思考方法を必要とすることになる。プロの棋士が理数系に強いと言われる所以である⁽²⁾。

8種40枚の駒の動きを見据えつつ、全体としての調和を図っていくためには、大局観と呼ばれる思考方法が必要になってくる。また、将棋には攻防における様々な型が存在している。戦法と呼ばれるそれらの型は、江戸時代の初期にほとんどが戦われていたが、現在に至るまでに何度も更新され続けてきた⁽³⁾。もちろん新しい型も開発されてはいるのだが、当初からの型に研究を加えてさらに新しい型を作っていたプロ棋士の努力には頭の下がる思いがする。

さて、このように複雑な遊戯ではあるが、終わりは単純なもので王将の駒が動けなくなったら負けである。将棋は戦争を模倣したゲームであるといわれているように、王将が詰められる、即ち次の一手で取られるような状態になればそちら側の負けである。将棋盤の上に王将の駒が存在しないような事態は考えられないのである。王将は軍隊の大將であり、将軍であり、陣営の中心的な存在であると言える。王将がなければ、将棋というゲームは成り立ち得ないのである。

将棋にとって大切な王将の駒には、よく見ると王将と玉将の2種類が存在していることに気付くはずである。我々は両者を一般的には「おうしょう」と発音して敢えて区別してこなかったが、実際には両者は同一の名称ではないのである。この違いは何時頃からあったものであろうか。また、それ以前はどの様に呼ばれていたものであろうか。これらの疑問に際して、先ず将棋という盤上遊戯の発生から、日本に伝わるまでの伝播経路を簡単に述べた後、王将駒の移り変わりを考えてみたい。

2. 将棋の発生と伝播経路

将棋はインドで起源したと伝えられる。インドでは神託をうける祭具として使用され、やがて博打として広められ、後に盤上遊戯としてチャトランガと呼ばれた。盤は、最初から四角い形をしており、8×8の枡目を持っていた。

チャトランガはB.C. 3世紀には登場していた。駒は王・象・馬・車と歩4つの8個で構成されている。駒は立体的な形をし、それぞれに形を変えて作られていた。これらの駒は、サイコロを振ってでた目に関する駒だけが進められるという、双六に似たものであった。それがやがてサイコロを使用しなくなり、四方が相対する方向にかわり、敵味方が向き合う現在と同じ形態のものにかわっていった。チャトランガが遊戯としてより博打として広められていった理由の1つは、サイコロを使用しなくなったために競技時間が短縮されたことが挙げられる。

競技者はときどき徴用される兵士達であった。そして、彼らの経験も加味されて、王を中心とする競技としての性格を帯びだしたために、駒がそっぽを向いて進むことはゲームとしての面白みに欠けるものがあつたのであろう。この時に将の駒が現れている。駒はすべて取り捨てであり、王だけになるとまけとなった。

中国へは起源前後に伝わったという考えと、最古の資料が8世紀にあることから、少なくとも7世紀以前に伝来の時期を置く考えに分かれる。それらはやはり博打としての伝来であった。中国の駒は平たい円筒形をし、上面に文字を書いている。伝来直後は形象的な形態をしていたものと考えられるが、博打としての有効的な利用を考えるならば、作成し易くかつ持ち運びに便利なそして、壊れにくくなおかつ軽い駒が必要とされたことであろう。中国駒の形態はまさにその条件を満たしているといわねばならない。駒の材質は不明であるが、木や石で作られていると考えることは十分に妥当性を帯びている。そして、立体性をなくしたことにより、また駒の方向性や種類を見きわめるために、文字が書かれるようになった。丸い駒であったため、文字は1文字であり、大きさはすべて同じとなった。

駒の種類は、将・帥（王将に相当以下同じ）、士・仕（金将）、象・相（銀将）、馬・偶（桂馬）、車・俥（香車）、卒・兵（歩兵）、そして砲・炮（日本将棋の飛車・角行の位置にある）の7種類となった。通常、敵と味方で2色に分けられている。盤は8×8の枡目であったが、チャトランガでは枡目を動く駒が象棋では線上を動くようになり、盤の中央に河界ができたために9×10の路となった。

朝鮮半島では丸い駒が八角形のものに変わった。駒の種類は、漢・楚（王将）、士（金将）、象（銀将）、馬・（桂馬）、車・（香車）、卒・兵（歩兵）、包（飛車・角行の位置）であった。ただ、楚の側は字を崩している。駒の大きさは、漢・楚が大きく、士と兵・卒がいちばん小さい。駒が成ることのできないルールである。盤では河界がなくなったものと同じく9×10の路であった。韓国では将棋と書いて（チャンギ）と発音する。

日本では駒の形が五角形に変わった。平安時代の将棋では、駒は玉将、金将、銀将、桂馬、香車、歩兵の6種類であった。飛車、角行はかなり後になって登場している。銀将以下は敵陣に入って成ると金将として扱われた。玉将と金将が成れないわけは、中国将棋（象棋）の王将と金将が宮城の外へ出られない、即ち敵陣に入って成り込めないことと無関係ではないと思われる。また、象棋の砲（炮）の駒に対応する駒が平安将棋には見あたらない。これは伝来した当時には砲（炮）、即ち火器類の存在していなかった事実があげられる。そのため、砲（炮）は欠落したのであろう。しかし、当時象がいなかったにもかかわらず、象の駒は銀将として存在している。謎で

ある。

3. 「王」の駒の移り変わり

インドで発生した将棋=チャトランガから日本の将棋に至るまで「王」の駒はどのように移り変わっていったのであろうか。駒の名称とその動きを見た後、日本の王将駒の出土地を一覧してみたい。

古代インドではラージャー（王）と呼ばれ、その動きは日本の王将と同じく縦・横・斜めに1枰動ける駒である。駒の名称と動きは、現代のインド（シャトランジと呼ばれている）でも同じである。ラージャーは底の丸い塔のような形をしている。

タイのマークルックではクン（君）と呼ばれ、駒の動きはラージャーと同様である。駒の形は底の丸い塔のような形をしている。

イギリスのチェスではキング（王）であり、日本の王将と同様に縦・横・斜めに1枰動ける。駒の形は、前2者と同様に底の丸い塔のような形をしている。

以上の駒はいずれも盤の枰目が8×8のものである。

中国の象棋（シャンチイ）は将・帥であり、敵味方で名称が違う。形は円形をしており、駒の動きは九宮と呼ばれる宮城の中を縦・横に一路進むことができる。象棋は9×10の線上を動くものである。

韓国の将棋（チャンギ）は漢・楚と呼ばれている。こちらは八角形をしており、宮の中を縦・横・斜めに一路動くことができる。盤は9×10の線上を動くものである。

日本の将棋は王将・玉将と呼ばれており、縦・横・斜めに1枰動けるものである。駒の形はいわゆる駒形と称されるもので、頭の尖った五角形を呈している。将棋盤は9×9の枰目を動くものである。

以上、駒の名称的には前三者が偶数の盤であるために、隣に対になる女王的な駒や部下を置くのに対して、後三者は奇数の盤であるために、王の駒が左右に部下を従えている。中国に伝来したときに駒の平面形や盤の状況などが大きく変わっていることに気付くのである。日本の王将は、駒の意味においてはインド伝来の「王」を引継ぎ、駒の名称においては中国の「将」を基礎におきつつ、その上に「王」及び「玉」の文字を冠して日本独特の名称を作り出していったと考えられる。

では次に日本出土の王将及び玉将駒を見て行きたいと思う。

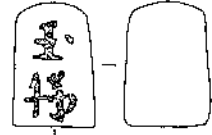
1. 大阪府四条畷市の上清滝遺跡から王将の駒が出土している⁽⁴⁾。旧河川の埋土中より寿永三（1184）年の記年名をもつ木簡と供伴している。
2. 京都市伏見区の鳥羽離宮跡第135次調査からは、鎌倉時代初期（1203）年頃の王将駒が溝跡から出土している⁽⁵⁾。材質は杉で、表面に「王将」と墨書されている。
3. 滋賀県大津市の滋賀里遺跡からは、溝跡より鎌倉時代中葉（13c中頃）の土器とともに、王将の駒が出土している⁽⁶⁾。この駒は表面に王将、裏面に王の1字が墨書されている。この駒は、平面形や裏面の墨書など新しい要素を含んでいるため、後世の駒とも考えられるが、とりあえず



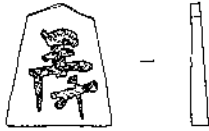
大阪府 上清滝遺跡



京都府 烏羽離宮跡第135次



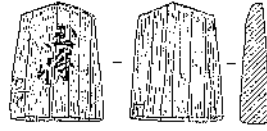
韓国 新安沖海底船



滋賀県 滋賀里遺跡



3



島根県 富田新宮堂館跡



6



7

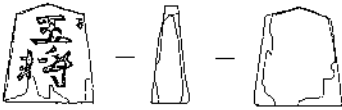


8



9

福井県 朝倉氏遺跡



静岡県 駿府城三の丸跡



14



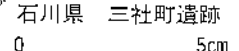
15

大阪府 難波宮跡

京都府 平安京御土居遺跡



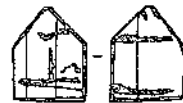
石川県 三社町遺跡



17



18



19

大阪府 高槻城三の丸跡

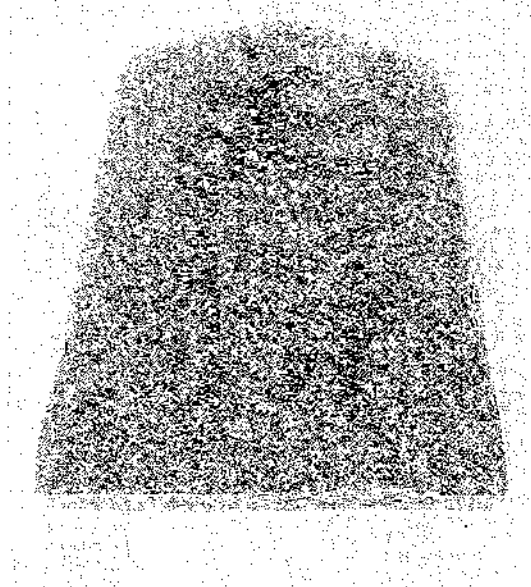


4はコピーを再トレース

供伴遺物の関係でここに置くことにする。

4. 韓国の新安沖に沈没した船から大量の鎌倉時代末期（1323頃）の陶磁器とともに玉将の駒が出土している⁽⁷⁾。表面に玉将と書かれている。
5. 島根県能義郡の富田城新宮覚館跡からは、室町時代末期（1554年以前）と考えられる玉将の駒が出土している⁽⁸⁾。駒の表面の上方に墨書されている。
- 6～12. 福井県福井市の一乗谷朝倉氏遺跡からは180枚もの将棋駒が出土しており、その中に玉将駒が5点、玉将駒が2点含まれていた⁽⁹⁾。駒は、いずれも館の外濠の埋土中より出土したもので、1567年を下限とする年代が与えられている。6・7は檜材で作られている。6・9は墨書後、玉及び王の「三」は彫り込まれている。また、8はすべて彫り込みがなされている。7は裏面にも「玉将」、11も裏面に「玉」と書かれている様である。
13. 静岡県静岡市の駿府城三の丸跡では、16世紀前半～17世紀前半の溝跡から玉将が出土している⁽¹⁰⁾。表面に大きく墨書されている。
14. 大阪府中央区の大坂城三の丸跡（難波宮跡の上層遺構）から玉将駒が1点出土している⁽¹¹⁾。17世紀前半と考えられる近世の整地層から出土したもので、表面に黒漆で書かれている。材質は榧である。
15. 京都市の平安京御土居遺跡からは、表面に黒漆で書かれた玉将駒が出土している⁽¹²⁾。1654～1675年頃の年代が考えられている。
16. 石川県金沢市の三社町遺跡では、17世紀後半～末（1670～80）頃のゴミ穴から玉将駒が出土している⁽¹³⁾。表面に黒漆で美しく書かれている。
- 17～19. 大阪府高槻市の高槻城三の丸跡の井戸跡から玉将駒が3点出土している⁽¹⁴⁾。17・18は形も大きく駒尻（駒の低部）も厚いもので、表面に文字を彫り込んだ後、墨を入れてある。17は杉材である。19は上の2点とは異なり駒自体も小さく、薄いものである。杉のへぎ板に表面には「工」と読める墨書、裏面には「二」と読める墨書が見られ、一部に朱点が遺存している。表面の「工」は恐らく「王」と書かれてあったものであろう。18世紀末～19世紀初頭の年代が与えられている。
20. 滋賀県大津市の大津城跡では、江戸時代後半期と考えられる玉将駒が堀の跡から出土している⁽¹⁵⁾。

これらの出土駒を見て分かることは、鎌倉時代末期の韓国新安沖海底船出土の玉将駒が現在のところ最古の玉将駒なのである。それ以前の駒の出土例が3例にしかならない現状では、確実な



三社町遺跡出土の玉将駒

ことはいえないが、14世紀頃に成立し、12世紀頃の書物を集めているとされる「二中歴」には、「玉将八方得自在」と書かれている⁽¹⁶⁾。最古の王将駒が寿永三（1184）年とされることから、12世紀頃には王将も玉将もともに存在していたものと考えられる。

4. 王将駒の性格について

ここでは、王将駒の特異性について考えてみたい。

将棋の中で、「王将」という駒はもちろん言うまでもなく中心的な駒である。と言うより、敵方の王将を目指して全軍が攻め掛かるわけであり、他の駒全部を犠牲にしてでも味方の王を守り、敵の王を攻め滅ぼす（詰める）事ができれば勝ちとなる。そういう意味で、王将は将棋という盤上遊戯の目的とされる駒であり、究極の駒と言えるかもしれない。この王将を詰めると言うルールは日本の将棋独自のものではないが、特徴的なルールであると言える。

王を詰めるルールはチェスや象棋などにも見えるが、それらは駒の取り捨てと言う制約を持つために、王を詰めるより互いに相手の駒を取り合った方が早く勝負がつく事が多い。従って、チェスなどは個々の駒の威力が大きいのになっているし、象棋などは居ながらにして相手の駒を取れるような「砲」と言う駒が存在するのである。これらの駒の取り捨てルールは、より搏打に近い原形を残していると言える。

象棋や韓国の将棋（チャンギ）には宮という「王城」が存在し、将（帥）・漢（楚）やその隣で王を守る役目を担っている士はその中から出てはいけぬルールになっている。日本の将棋で、王将と金将の裏に何も文字が書かれていない、つまり敵陣に入って成る事ができない理由は、この宮による影響を受けているものと思われる。つまり、王将は城の中に居り、金将（現代では、金将と銀将のうちの3枚の駒）がそれを守護するという図式の基本型は中国象棋の宮の存在にあったのではないかと思われる。

また、その他のルールをながめてみれば、日本の将棋以外は敵陣に入ったときに成れる駒は「歩」の駒以外にはないのである。日本の将棋については、銀将以下の駒が敵陣に入ったときには、すべて「金」に成って活躍する事ができるのである。また現在の将棋では、飛車は竜王に角行は竜馬に成り、一層働きを増す事ができる。上記のように王将と金将が成らないわけは、王将は自陣にあって守られるべき駒であり、金将はそれを守るべき駒であり、どちらも敵陣に攻め込む駒ではないと言うところを駒の特徴として持っているからである。従って、平安時代の将棋（小将棋）では、王将は著しく駒数が減少するまで（自らが危なくなるまで）はほとんど動かない事が多かったのではないだろうか。

世界の「将棋」に類する盤上遊戯で、なくてはならない「王」の駒がこれ程まで動きの少ない駒になっているのは、王は攻める駒ではなくて攻められる駒であるという事と、王の動きを最大限にしまえば、捕まえられなくなる事である。即ち王自ら兵器と化して戦うという事は、英雄が活躍する戦争ゲームに成り変わってしまう恐れがあるからである。王は、あくまでも詰められなければならない駒なのである。

王将・玉将駒出土遺跡一覧表

番号	駒の種類	遺跡名	所在地	年代	寸法 長さ 幅 厚さ (cm)	遺構	遺跡の性格	材質	その他
1	王将	上槽池遺跡	大阪府四條畷市	寿永三(1184)年	3.2 × 1.7 × 0.5	田河川	集落跡		墨書
2	王将	鳥羽離宮跡第135次	京都市伏見区中島柳屋町	鎌倉初期(1203)	3.7 × 2.3 × 0.5	溝	離宮跡	杉	墨書
3	王将	滋賀里遺跡	滋賀県大津市滋賀里	鎌倉中葉(13c中頃)	3.3 × 2.9 × 0.5	溝			墨書 裏面に「王」
4	玉将	新安沖海底船	韓国	鎌倉末期(1323頃)		海底	沈没船		
5	玉将	富田城新宮堂館跡	豊根県能義郡広瀬町	室町末期(1554以前)	4.5 × 3.5 × 1.1		館跡		墨書
6	玉将	朝倉氏遺跡	福井県福井市城ノ内町	1567下限	3.7 × 3.3 × 0.2	外濠	館跡	檜	墨書後、玉の「三」は彫り込み
7	玉将?	朝倉氏遺跡	福井県福井市城ノ内町	1567下限	(2.6) × (0.9) × 0.1	外濠	館跡	檜	裏面も「玉将」か
8	王将	朝倉氏遺跡	福井県福井市城ノ内町	1567下限	2.7 × 2.1 × 0.2	外濠	館跡		すべて彫り込み
9	王将	朝倉氏遺跡	福井県福井市城ノ内町	1567下限	3.6 × (1.7) × 0.2	外濠	館跡		墨書後、玉の「三」は彫り込み
10	王将	朝倉氏遺跡	福井県福井市城ノ内町	1567下限	4.0 × (3.6) × 0.5	外濠	館跡		
11	王将?	朝倉氏遺跡	福井県福井市城ノ内町	1567下限	(4.3) × (2.1) × 0.3	外濠	館跡		裏面は「玉」か
12	王将	朝倉氏遺跡	福井県福井市城ノ内町	1567下限		外濠	館跡		
13	玉将	駿府城三の丸跡	静岡県静岡市追手町	16c前半～17c前半	3.3 × 3.0 × 1.3	溝	城跡		墨書
14	王将	大阪城三の丸跡	大阪市中央区法円坂	17c前半	4.0 × (3.6) × (0.6)	近世整地層	城跡	樞	黒漆書
15	王将	平安京御土居遺跡	京都府京都市	1654～1675					黒漆書
16	玉将	三社町遺跡	石川県金沢市三社町	17c後半	3.0 × 3.0 × 1.1	ゴミ穴	城下町		黒漆書
17	王将?	高槻城三の丸跡	大阪府高槻市城内町	18c末～19c初	3.2 × 3.0 × 1.1	井戸	城下町	杉	彫り込み後、墨入
18	王将	高槻城三の丸跡	大阪府高槻市城内町	18c末～19c初	3.2 × 3.0 × 1.1	井戸	城下町		彫り込み後、墨入
19	王将?	高槻城三の丸跡	大阪府高槻市城内町	18c末～19c初	1.9 × 1.5 × 0.3	井戸	城下町	杉か	墨書 朱点遺存
20	王将	大津城跡	滋賀県大津市荒大津	江戸末期	2.9 × (2.5) × 0.9	堀	城下町		

5. 王と玉の違い

1120年代の終わり頃の書とされる「二中歴」には、将棋駒の動きについて書かれている。それには王将ではなく玉将となっている事、敵の玉一将だけになると勝ちになる事、また続いて記されている大将棋の玉将の位置が中央に置くように指示してあるにもかかわらず、小将棋には玉将の位置は指示していない事などが分かる。これらを見ると、当時の盤は8×8か9×8の2種類であろうとこれまで考えられているが、私は8×9であった可能性もあると考えている⁽¹⁷⁾。また、現在の将棋にある王将と玉将ではなく、玉将のみであったように書かれている。

それでは持ち駒の使用と王将はいつから登場したのであるか。今、手元にある遺跡出土の将棋駒には、平安時代末期（1184年）とされる大阪府四条畷市上清滝遺跡の王将が最古である。玉将の最古のものは、鎌倉時代末期（1323年頃）の韓国新安沖海底船遺物に出土例がある。遺跡出土の駒によるならば、王将もかなり早い時期に登場している事がわかる。という事は、既に平安時代には王将も玉将も存在していたと考えて良いと思われる。この違いは何を意味するものなのであろうか。

増川宏一氏の『将棋』1（1977年）によれば、文安3（1446）年撰の『壺叢鈔』には、「西王イマサン事ヲ忌テ、必ズ一方ヲ玉ト書ク」とされているが、実際には紛らわしいので区別をしたとされている⁽¹⁸⁾。また、奥山紅樹氏は玉・金・銀は宝物を示し、桂・香は佳宝を示す形容詞であるために、元の将・馬・車の上に冠せられたものであると述べておられる⁽¹⁹⁾。命名の正確な理由はわからないが、歩兵の歩の字を除いて美称であることは間違いない。ただ言える事は、将棋の駒では王将のみ敵に取られる事がない為、敵味方の区別をつけておく必要はあったと思われる⁽²⁰⁾。

中国の象棋や韓国の将棋などでは、王に当たる駒は敵味方の区別がなされている。将棋が日本へ伝えられた経路は、中国から朝鮮半島を経由して来たものと考えられるなら、その当初から2種類に（たとえば王と玉に）分かれていたとしてもおかしくない。王と金のみ成れない事が、宮城の中からでられないと言う中国の象棋や韓国の将棋に見られるルールにぴったり当てはまっている（つまり敵陣に攻め込めない）のである。そして、敵陣3段目に入ったなら成れると言う事も、中国象棋の河界を越えたら敵の陣地であると言う考えの延長線上にあると思われる。また、王に当たる駒以外は同じ（象・相、士・仕、などわずかな違いはあるが、それらはほとんど同じ発音の字が使われている）種類の文字が書かれた駒である事も共通している。チャトランガから象棋を経て将棋にいたるまでに、駒の共通性が進歩してきていると言える。

6. おわりに

韓国の将棋で象の駒は用の字に動くと言われるように、複雑な駒の動きを文字に変えて覚え易くした言葉がある。そして、室町時代の駒に記されているように、駒の表面には文字とその駒の動きを線や点で書かれているものがある。駒の動きを記したものは、鎌倉時代以前には発見されていない。動きを記した駒は、いわゆる将棋の初心者にも分かるように配慮されていたものであろう。

ここで、将棋が日本に伝えられた頃の事を考えてみると、駒の動きは何らかの形で記して分かるようにした可能性がある。立像型で日本に伝えられたとするならば、その形は余りなじまないから早くに平たい形になったものと思われる。そして、板切れか小石に傷をつけて駒の動きと他の駒との違いを明確にしていたものと想像される。王将の動きは八方に1こまずつ動ける。王の字の横線のそれぞれ初めと終わり、縦線が横線と交わる交差点を数えると、9つある。それはまるで、王将が八方へ動けることを文字にしたような印象を与えてくれる。中国象棋の将と帥、韓国将棋の漢と楚の駒が動くことの出来る路も王の字と同じ範囲なのである。王将の王の字の付けられ初めは、案外このような事かも知れない。

最後に、この小文を作成するにあたって、以下の機関及び方々にお世話になった。ここに記して感謝の気持ちを表わしたい。石川県埋蔵文化財センター、大津市教育委員会、四条畷市教育委員会、木立雅朗、松浦俊和、野島稔、福知幸（順不同敬称略）。

参考文献

- ・増川宏一（『将棋』1 ものと人間の文化史23 法政大学出版局 1977年）

註

- (1) 現在の将棋には王将と玉将が存在しているが、ここでは煩雑さを避けるために一般的に「王様」という意味で使用するときは、王将の用語を使用する事にして置く。
- (2) プロの棋士の頭脳が特に優れている事の例えとして、東京大学を卒業している兄のように何故東京大学に行かなかったのかと問われたある九段棋士は、自分は彼らより優れているからだと言ったという逸話が残されている。それほど棋士の頭脳は優秀だと言う喩えである。
また、コンピューターソフトで将棋を扱ったものがあるが、未だにアマチュアの初段～二段止まりの実力しか持てないものである。初手から可能である三十手を考え、その先の無限ともいえる指し手を持ち駒まで絡ませて考えていく事は、膨大な時間と労力を費やすことになる。このコンピューターの計算力に対してプロの棋士は、長年の経験と感で無駄な手は最初から読まないものである。そこに現在のコンピューターの限界と人間の頭脳の差が如実に現れている。
- (3) 天狗太郎『将棋の民俗学』作品社 1992年
- (4) 四条畷市教育委員会の野島稔氏よりご教示をいただいた。
四条畷市教育委員会『上清滝遺跡』—現地説明会資料—1990年
- (5) 磯部勝 他「京都・烏羽離宮跡」（『木簡研究』第13号 木簡学会 1991年）
- (6) 三宅弘「滋賀里遺跡出土の将棋駒について」（『滋賀文化財だより』No.127 財滋賀県文化財保護協会 1988年）
- (7) 水野和雄「将棋の流行」（河原純之編『古代史復元』10 講談社 1990年）
- (8) 小泉信吾「駒の出土例とその意義」（『京都府埋蔵文化財論集』第1集—創立5周年記念誌—財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年）
- (9) 水野和雄「第5章 遺物」（『特別史跡一乗谷 朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』 福井県教育委

員会 1979年)

福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所『特別史跡—乗谷 朝倉氏遺跡 V —昭和48年度発掘調査整備事業概要—』1974年

福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所『特別史跡—乗谷 朝倉氏遺跡 X VI —昭和59年度発掘調査整備事業概要—』1985年

(10) 静岡県教育委員会『駿府城三の丸跡発掘調査報告書』静岡県文化財調査報告書第38集 1987年

(11) 財団法人大阪市文化財協会『難波宮史の研究』第7(報告編)1981年

(12) 註8に同じ。

(13) 石川県埋蔵文化財センターの木立雅朗氏よりご教示をいただいた。

(14) 鐘ヶ江一朗「V資料紹介 高槻城跡出土の将棋駒」(『高槻市文化財年報昭和63・平成元年度』高槻市教育委員会 1991年)

(15) 大津市教育委員会の松浦俊和氏よりご教示をいただいた。

松浦俊和「滋賀・大津城跡」(『木簡研究』第7号 木簡学会 1985年)

(16) 「二中歴」(近藤瓶城編『改訂史籍集覧』第23冊 近藤活版所 1901年)

(17) 増川氏などはタテ8目と考慮しておられるようであるが、枡目を数えると中国の象棋は河界をいれて8×9、韓国の将棋も8×9になる。中国の象棋が現在と同じ形になったのは、増川氏は12世紀以前、木村氏は10～11世紀頃と考慮しておられる。日本への将棋の伝来がその以前であるならば、完成された中国象棋の影響は少ないと言わねばならない。

三宅 弘「将棋史研究ノート」(1)・(2)—将棋について思う事—(『滋賀文化財だより』No180・181 滋賀県文化財保護協会 1992年)

(18) 「壺裏鈔」(『日本古典全集』1936年)

(19) 奥山紅樹「桂香の由来と五宝の概念について」(『将棋世界』第43巻3号 1979年)

(20) 中国の象棋、韓国の将棋には「王」に相当する駒が2種類存在する。日本の将棋への影響を少なからず考えるならば、王将と玉将にわかれる原因の一端を荷っている可能性は考えられてしかるべきである。

編集後記

今年の『紀要』は例年になく原稿の集まりが早かった。これも偏に各執筆者の日々の精進の賜物か。

今後も、洛陽の梓価を高めるような『紀要』であり続けたい。

編集者

平成5年3月 初版
平成6年3月 2刷

紀 要 第 6 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241